



やり投げ



走り幅跳び



100m障害



陸上・女子七種競技 学生チャンピオン



勝者は「クイーン オブ
アスリート」と呼ばれる。
陸上競技女子七種競技を制
した強者^{つわもの}だけに称号が贈ら
れる。中央大学文学部1年
のヘンプヒル恵さんは4月
に学生新記録をマークした
注目選手。「なぜ七種競技
を」の質問に「自分の輝け
る場所」と答えた。輝くま
では、自らを磨く日々である。



躍動する中大選手。1位-ヘンプヒル恵選手（1年）＝左から4人目、
2位-川村涼伽選手（3年）＝右端、4位-宮崎紗希選手（3年）＝左から2人目

七種競技最終種目の800m、
最後の力を振り絞る（右手前）



表紙の人

Meg
Hemphill

めぐ ヘンプヒル恵さん（文1）

関東学生対校選手権（関カレ、5月14～17日＝日産スタジアム）七種競技の最終種目800m。米国人の父と日本人の母を持つヘンプヒル選手はゴールを過ぎたあたりで前のめりになり、トラックに倒れ込んだ。完全燃焼したシーンである。

いつもなら競技終了後、すぐにトラックやフィールドに一礼するのだが、疲労困憊こんぱいの体ではすぐに反応できなかった。ひと息ついて立ち上がり、走ってきたトラックに一礼した後、同じ2組を走った中大2年の藤

沼朱音選手と抱き合い、2日間の激闘をたたえ合った。

800m種目で付けるゼッケンは6種目終了時点の順位を表示する。彼女は1番を付け、そのまま優勝した。総合得点は5461点。自身が持つ学生記録の更新とはならなかったが、1年生でいきなり関東の頂点に立った。

関カレは今回で第94回、東京箱根間駅伝が第91回。優勝者は歴史の重みを感じる。

第1日に100m障害、走り高跳び、

砲丸投げ、200mの4種目。第2日は走り幅跳び、やり投げ、800mの3種目。身長167cmの19歳が連日疾走し、しなやかに跳び、重さ4kgの砲丸や全長2.2～2.3mのやりを遠くへ投げる。「体にも充電器がほしいくらいです」。100m障害を得意とし、スプリント種目で得点を稼いでいる。

入学後すぐに学生新記録

入学式のあった4月の26日、世界選手権（8月、北京）代表選手選考を

自分の輝ける場所です

■タフ

関カレの4日間は、七種競技の前後、計3種目に出場した。第1日の走り幅跳びで4位。第2日は100m障害で優勝。第3～最終日は七種競技。最終日、七種終了後に4×400mリレー決勝で第3走者として順位を上げ、チームの2位に貢献した。

走りは七種・100m障に1着、同200m・2着と好成績だ。「対校試合なので勝つことをイメージしていました」とヘンプヒル選手は言い、肩で息をしていた。

■監督はスタンド

陸上競技の規則は厳しく、試合中は選手の控室への「出入りを認めない」と記す。中大の高橋監督は他大学指導者と同じく

選手に近いスタンドで観戦した。

跳躍・投てき種目ではフェンス越しに監督と選手が話し合う。ヘンプヒル選手は「1本ずつ違うので毎回コメントをもらっています」と感謝し、「4日間の大会、監督は大変やなあと思います」と、おもんばかった。

■関西弁

ヘンプヒル選手の楽しみの一つは、同じ京都から上京した他大学の友人と京都弁で話すこと。「おしゃべりするとスッキリします」。東京では「みんな関東の人なんで、標準語はちょっと固苦しい」

友達になった同じ中大1年生が、ある日ヘンプヒル選手に

兼ねた日本選抜和歌山大会で大会新、日本ジュニア新、学生新記録となる5678点で優勝し、日本歴代3位に入った。京都文教高時代には日本ジュニア記録を更新している。

「一種目で戦うのもいいとは思いますが、七種を続けるのは、自分の輝ける場所がそこにあるから、ですかね」

そう言って首をすくめ、こう続けた。

「そこが一番、自分の見せどころ

なんです。全部できてこそ、すごくカッコイイし、達成感があります」

中学時代、四種競技(100m障害、砲丸投げ、走り高跳び、200m)に挑戦したのが始まりだった。「試合でうまく行って」この競技が好きになった。

七種競技の出場選手は全国大学レベルで25人ほど。オールラウンダーは他の単一種目より競技人口が少ない。「友人であり、ライバルであり、他大学でもみんな仲良し、一緒にいるとすごく楽しい」

通常の練習のほか、専門七種目に鍛錬と工夫を重ねる。けがの予防もしなければならない。互いの努力を知っているだけに連帯感がある。大学は違っても“同じ釜の飯を食う”仲なのだろう。

お母さんに感謝

京都から上京して初めて親元を離れた。中大寮に入り、自分のことは自分でできるようになって、母親への感謝が芽生えた。「洗濯にしろ、放っておいても、誰もしてくれない。い

つもやってもらっていたんやなあと思います」

親のありがたみを「すごく分かります」とインタビューでは強調するものの、面と向かって感謝の言葉となると「そんなぁ恥ずかしくて言えないですよ」と照れた。

母の日(5月10日)は『いつもありがとう』のメールを送った。花を贈るつもりでいたが、試合と重なり、慣れない東京では思うような手配ができなかった。

試合前は神経を集中し、種目の出番間近には自らに気合いを入れる。前髪を左耳に挟む。ショートカットの髪を後ろで一つに束ねる。ピンク色のゴムでびしりと止める。「私、ピンクが好きなんです。知っていたのかな」。思いをはせる相手は小学6年の弟だ。「輪ゴムで作ったようで最近はやっているみたい。母が持ってきてくれました」。中学3年の妹も長女の応援団だ。

走り幅跳びを含め、走る種目では5本指の靴下をはく。指で土をしっ



言った。「わたしも関西弁でしゃべろうかな」。『めっちゃ』『なんでやねん』。テレビで聞き慣れた関西弁も、首都圏で育った学生が口にすると「全然違う」とヘンプヒル先生。どうやらアクセントが違うようだ。

■東京の味

関西人は東京の味を「濃い」といい、「うどんはツユが黒い」と表現する。初めての東京生活。ヘンプヒル選手は「お総菜を買ったとき、こっちは濃い味やなと思いましたが、うどんはあまり感じないです。学食ではセットメニューをよく食べています」とキャンパスライフを楽しんでいる。

■七種競技／走って 跳んで 投げて

第1日		第2日	
10:00	100m障害	9:00	走り幅跳び
11:00	走り高跳び	11:45	やり投げ
13:30	砲丸投げ	14:35	800m
16:30	200m		

■男子は十種競技

第1日・100m、走り幅跳び、砲丸投げ、走り高跳び、400m。
第2日・110m障害、円盤投げ、棒高跳び、やり投げ、1500m。

かりつかむ。野球の“ゴジラ”松井秀喜選手(元ヤンキース、巨人)と同じスタイルだ。

中大伝統の七種競技

中大女子陸上競技部は七種競技が強い。1984年に屋ヶ田直美選手が5551点で学生記録を更新した。2008年には日本学生選手権(インカレ)で浅津このみ選手が優勝。12年には赤井涼香選手がチャンピオン。関カレでも12年は覇者の赤井選手に続き、5位に富崎千加選手。13年は5位に羽鳥怜奈、6位に豊田梓両選手が入った。14年の2位は羽鳥選手だ。

ことしの関カレにはヘンプヒル、藤沼、豊田の3選手が名を連ねた。エントリーは19人、中大は層が厚い。群馬県の自宅から中大多摩キャンパス陸上競技場まで、車で日参する高橋賢作監督の熱血指導の賜物だ。

学生記録保持者のヘンプヒル選手には大きな期待がかかる。この夏に世界選手権、来年はリオデジャネイロ五輪。2020年東京五輪で24歳。選

手ならだれもが金メダルを取りたいと思う。彼女はこうとらえている。

七種の競技中は「緊張」と「緩和」の繰り返し。

「前の種目がダメでも気持ちを切り替えてやってます。まあいいやと思わないとやっていけません」

「力を入れるところ、抜くところとあって、抜くところもけっこう大事なので必要やなあ、と」

「母は競技のことを何も言いません。好きにやったらいいよって。それで頑張れる。頑張り過ぎず、頑張れるのがいいのかなあ」

ほんのりした顔を見せる。しかし、ライバルはもう一つの顔を知っている。ピンクの髪止めをしたとき、ヘンプヒル恵選手は勝負師と化す。

